



多摩キャンパスの「白門」

白門(はくもん)は、中央大学を象徴する呼び名として長く愛されてきた。一方で、近年では、多摩キャンパスの桜広場にある創立100周年記念ステージが、本学の白門として紹介されることが多くなっている。そこで、今回はその由来や歴史的な経緯について改めて整理し、多摩キャンパスの「白門」について考えていきたい。

白門の由来

本学に白門が初めて登場するのは、1928年のことである(大久保次夫「白門」名称の由来『中央大学新聞』第479号、1957年)。当時、大久保が作詞した学生歌の歌詞「聴け白門の暁を、聴堂に鐘鳴り出ず」に登場する白門が初出とされる。大久保によると、本学の白い徽章と他大学で使われていた「門」(東大の赤門、早大の稲門など)を組み合わせて、白門と表現したとのことである。

つまり、白門とは「白い徽章を同じくする中央大学の同門」を指す言葉、本学の精神的な結びつきを象徴する呼称なのである。以下では、本来の意味の白門と後世に作られたオブジェを指す「白門」をカッコの有無で分ける。

駿河台校舎の「白門」

大久保が作ったとされる白門の呼称は、次第に本学の中で浸透していく。『中央大学新聞』第3号(1929年)では、提言「新学友会委員に激す」に「白門の使命をして万国的にいやが上に重からしむべく努められよ」とあり、第5号には投書コーナー「白門の声」、第7号には「白門歌壇」が設定されている(「白門の由来」『タイムトラベル中大125』2010年)。さらに、第10号には運動会記事「飛べよ、躍れ! 上井草グラウンドに白門健児飛躍の秋深く、見よや飛龍の姿を!」があるように、1920年代末には本学の呼び名として白門が定着していった。

戦後になり、1957年から大学祭を「白門祭」と改称し(大久保が白門の由来について整理したきっかけでもある)、一般的にも本学の呼称として白門が定着していく。さらに、1958年には白い門が正門に設置され、これまで存在しなかった実際の門としての「白門」ができたのである。しかし、本学は1978年に多摩キャンパスに移転することになり、駿河台校舎正門に設置された「白門」は新しいキャンパスには引き継がれなかった。



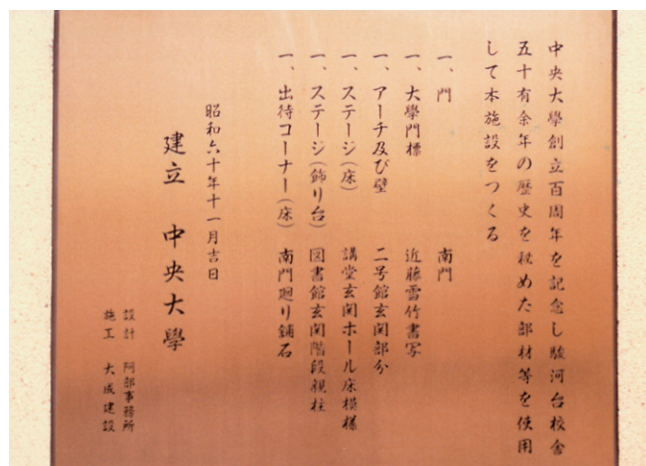
駿河台校舎正門

多摩キャンパスの「白門」

多摩キャンパス移転後の1985年、桜広場に創立100周年記念のオブジェが建設された。駿河台校舎の歴史を伝える建材を使用したもので、南門、大学門標(近藤雪竹書写)、2号館玄関部分、講堂玄関ホール床模様、図書館玄関階段親柱、南門廻り鋪石が移築されている。これが、現在多摩キャンパスの「白門」として認識されているもので、「創立100周年記念ステージ」と呼ばれている。

本学は2025年には創立140周年を迎え、創立100周年を記念して建設されたステージも、多摩キャンパスとともに40年の時を刻むことになる。その間には、たくさんの学生が桜の花見や白門祭などのイベントで、記念ステージとともに過ごしてきた。

白門とは、本学の精神的な結びつきを象徴する呼称である。40年の時を多摩キャンパスとともに過ごしてきた象徴的な建造物である創立100周年記念ステージを、カッコ付の多摩キャンパスの「白門」と位置付けていくことも良いのではないだろうか。



創立100周年記念ステージ銘板



創立100周年記念ステージ